郷土研究に二つの悩み

石井左近

一、資料の煙滅を守れ

私等の長く住む地域の偽らざる姿を、広く深くつぶさに研究すると、地域的特異性のあるものと、また共通するものとがある。郷土の春夏秋冬の山川風物、一木一草も路傍の一石に至るまで、天地自然の現象これすべてが、限りない愛着を感じ、一生を通じて忘れ難い土地である。この忘れ難い愛着心は、精神上の人間完成への尊い糧となるのである。郷愁という言葉のあるのも、非行青少年の多くが愛郷・愛家の心の故郷を失ったものに多く、また犯罪者に住所不定が多いことからも、愛郷心の必要を認めねばならぬ。それには郷土の重要資料は経済を超越し、不利不便を離れて保護し保存を計るべきである。

われ等の祖先がこの地域を舞台として、成長し生活した遺跡遺物は、広義的にはこれ総べてが郷土歴史の一部でもあり、また日本歴史の一部となって相互関係にあるものもあるので、郷土の研究のみでは視野が狭いので、他の市町村にとゞまらず、他府県の広い地域に亘る調査研究も必要で、体系づける上にも極めて重要である。

郷土に発生した人文は、有形と無形を問わずすべての資料を理解し認識し、愛護する心が起きて来るのが当然の人情であって、その多くの資料を愛好し、これを保存する精神は親愛敬慕の念から発するので、共存共栄の集団的道義心を養成するので、郷土の発展に寄与する原動力と言えよう。然るに近時は郷土の重要な各種の資料が軽視され、認識不足で無造作に破壊されたり、動植物でも絶滅に頻するに及んでから、そろそろ保存策に乗り出す、所謂泥縄式と思われるようなことが多いのではあるまいか。また貴重な行事などが簡単に廃止されたりする傾向が著しい。破壊や廃止は極めて簡単であるが復活は容易でない。日本人は伝統を尊重して来た民族であるから、学童の頃からの指導啓蒙がよろしく行われることが望ましいのである。もっと地域社会の人々が、郷土愛護を認識し、全国の市町村当局に於ても、郷土資料の保存と愛郷心の啓蒙を真剣に考え、速に方策をたてゝもらいたいと思うが、さて実施となるとこれも悩ましい問題もあるであろう。こんなことを悩みつゝ本稿を書いている間にも、何処かで貴重な資料が失われているであろう。これを保護し保存するには、常に郷土の資料を調査研究している専門的篤学の士に参考意見を聞くことが最もよいことゝ思うのである。

二、郷土史家の輩出を望む

生れ故郷の市町村において、郷土の研究に専念しても、それで生活の出来る人は先ず殆どあるまい。地方で個人が独力で郷土関係の著述を刊行しても、贈呈ばかり多くて生活の補助どころか、印刷費が出ればよい方である。従って家業の片手間の趣味としての研究となるのは当然である。家業の片手間でもよいから真剣に研究する篤学の士はざらにはおらない。精魂こめて永続する堅い信念をもっている篤学の士は極めて稀れな存在である。それも無理はないので現在の社会状態では、郷土の調査とか研究というような、地味でパッとしないのみか、何の償もないことに若い優秀な適格者がある筈がない。現在に郷土研究されている篤学の士の家督相続されるものが、果して父祖が積年の努力で得た、多くの貴重な資料

や図書類を生かして、郷土の為めに活動し奉仕する継承者が幾人あるであろう。

郷土学はたゆまざる不断の努力の継続が肝要であるから、余程の固い信念をもつて根気よく、一生を通じ努力の積み重ねによつて成果が挙るのである。現に業務上で郷土学の研究に興味を持つ学校の先生とか官公吏は別として、一般の民間人で郷土の調査研究に志すには、五つの条件が揃うことが尤も望ましい。これは私の以前から提唱していることである。なかなか五条件が揃うことは至難であるから、何れかを工夫し克服せねばならぬ、これにはサラリーマンの方々の想像以上の心身の苦労が伴うのであると思う。一般民間の郷土史家には日曜も土曜も休日も休暇もないのである。従つて郷土学研究に仲間入りしても、永続するものは段々減少し、一時的好奇心のような結果になつてしまうのである。

郷土学は広範に亘つているので、同じ郷土に専門的分野の篤学者が夫々に幾人かおれば、分担も出来て負担もずつと軽減されるのであるが、狭い地域の郷土にはそういう人材は稀薄といつてよいだろう。だから郷土学の一般も勉強せねばならぬので、世間的には余程の物好と思われ、懐古的で骨とう好きと評されたり、変り者の存在になつてしまうのである。然るに郷土のことで調査の必要や報告を要することが起つたり、また学校の宿題や卒論などで必要に迫つた時には、いち早く郷土史家に教を乞うことが甚だ多い、その他に郷土のことで来訪者や電話、郵便での問合せもある。中には教えるのが当り前のような横着な態度や言葉づかいの者もいる。また調査のための来訪者には案内や照会せねばならぬこともある。例えば暑中休暇中だけでも同じ家に四五回も案内したり、又は照会することがあると迷惑をかけるので気がひけるので、正直のところ案内する前日お願いに行つて、その時に又は時折り気を配つて置かないと案内致しても、来訪者に気まずい空気を与えたくない心遣いでもある。学校や役所勤めの職員なれば、職務上案内したり調査したりするので、そんな心の配りも殆ど必要ないであろうが、一般人同志ではそんな厚顔なことはなかなか出来ない。こういうところにも一般の郷土史家には人の知らない苦労や悩みがあるのである。交通の至便なところで資料が豊富にある市町村に住み、一般に郷土史家と目されている者ほどこの苦労が多いであろうと思われるのである。さきに郷土研究を真剣に取り組むには、五条件が揃うことが望ましいと述べたが、そのことに就いても読者各位には、種々ご意見がありましようが、お叱りを覚悟の上でサラリーマンでない、郷土史の実態の一端を述べんとして、五条件を与えられた余白で説明する。

㈠身体が強健である。これは実地調査等の労に耐える体力の必要は当然である。㈡趣味の学問であること。㈢基礎的教養をしている。㈣経済的に或る程度の余裕がある。これは資料を求めることや調査の為めの諸費または旅費社交費が必要な場合に工面が出来ねばならないからである。㈤余暇の工夫が出来ること。この㈤の工夫をすることが最も至難である。㈣までの条件は曲りなりにも揃つても、この余暇があることは郷土史家として認められるれば、その度を増ほど対外関係で必要を感じる度合が多くなるのである。何の償いもないのに昨日も今日もと来訪者と応接したり案内に飛び歩いて、家業は家族まかせにすることが多くなるほど、家族のものはお茶を出したり、

時間の関係では食事を出さねばならず、家族のものまで満足に仕事が出来ないのである。遂に家族のものも不平を唱える様になり、後には親に見放され妻子には愛想をつかされ、人生の晩年を気の毒に送つた人を私は知つている。この人達も郷土史家としては、全国の一覧にあり幾種かの著書もあり、郷土的人物として、業績も高く評価されながら、本人は黙々として椽の下の力持ちとなり、蔭の人となつて地方的にも国家的には勿論のこと、表彰もされたことなく褒賞・叙勲など人ごとである。こうした境遇で淋しく世を去つた。この人達にすればそんな欲がましいことは毛頭考えてもおらなかつたであろうが、それだから郷土史家は今の御治世に、そうした取扱をして置いてよいものであろうか。郷土史家に対しこのまゝで、若くて優秀な真に信念に生き、家族の協力を得られる篤学の郷土史家が多く輩出して、郷土社会の為めまた学問のために奉仕するものが続出するであろうか。私はこれが今後の郷土研究の問題点であると考え、この悩みを一日も速かに解消して信念に生きた立派な郷土の篤学の士が輩出することを期待するものである。